

====このお便りは私が担当する太極拳教室の皆さんに8月を除き毎月お届けしております。====

今月のトピックス 瑞江鶴の会が本部道場で練習

江戸川区の「瑞江鶴の会」は、さる10月9日（火）総勢26名で神田錦町の日本健康太極拳協会の本部を訪問しました。まず1階の展示室で楊名時先生の遺品や記念品などを見せていただいた後、2階の大稽古場をお借りして特別練習を行いました。終わった後は近くのホテルの眺めの良いレストランで昼食会を開催して散会しました。



健康妄語録 (今回は休載します)

左顧右盼～さこ・うべん～

【第1話 太極拳の源流を辿る】

15) 王宗岳説への疑問の数々
『太極拳譜』の作者は王宗岳ではなく、実は武禹襄そのものではないかという説についてはいろいろな論証がさまざまな論者から挙げられていますが、まずこの『太極拳譜』の構成を見てみますと、

太極拳経（論） 「太極は無極より生じ…」で始まる、太極拳譜の中軸となる論文。
十三勢（行功）歌 7言24句から成る詩歌で十三勢理論を解説したもの。

太極拳積名 ①と②を繋ぐ重要な短文。“太極拳は一名「長拳」またの名を「十三勢」という”としてその

名前の変遷と関連を明らかにし、次いで十三勢（いわゆる八門五法）なるものの具体的用語を列記したうえ、それが八卦・五行に由来していることを明示している。



十三勢行功要解 十三勢歌を解説したもので、これは当初から武禹襄の作とされているもの。

打手歌 打手（推手）の要諦を7言6句で簡潔に歌ったもの。

の5編によって成り立っています。

さて、王宗岳への疑問というのはおおむね以下のようなものです。

1) 「太極拳経」にはもともと題名もないし、奥付けも無い(つまり、作者名、発刊日、発行者など一切ないということ)ところから、そもそも原本の信憑性に疑いがあるというもの。(もともと、500字足らずのもので、原本も印刷物ではなく手書き本であった可能性を指摘する反論もある。)

2) 発見のいきさつと原本が焼失してしまったという言い訳に疑いがあるという見解。そもそも武禹襄が1852年にはるばる河南省舞陽県塩店を訪れたというのが怪しい。なぜならこの年はすでに清朝末期の大混乱の時代であって、わざわざ、河北省あるいは首都の北京から道のりで700キロも1000キロも離れた河南省でも南に位置する舞陽県まで行ったのか、行けたのかというのが大いなる疑問である。つまりは武兄弟が仕組んだ嘘ではないかという説。

3) 王宗岳の経歴や行動がつまびらかでなく、なぜ、河南省舞陽県塩店に一冊だけの原本が存在していたかの蓋然性が薄い。武術家で、1791年から1795年ごろ河南省の洛陽や開封など黄河流域に滞在していたらしいということだけで、生年も没年も不明。先の唐豪氏は、王宗岳が槍術の名手で『陰符槍譜』という本を書いているところから、この『太極拳譜』もまた王宗岳の作であるとしている。(これにはまた反論があって、実は「太極拳経(論)」はこの『陰符槍譜』の総論部分の文章であって、その証拠に文中には「太極拳」とか「拳」とか言う文字はまったく無いというもの)

4) 王宗岳が太極拳と称する拳法を広めていた形跡も、同時代の陳長興あたりと接触した痕跡も見当たらない。

5) もし、「太極拳」が王宗岳が独自に創出した拳法、そしてそれに付けた名前であるとする、『太極拳譜』があっても彼の「拳法」の中身は皆目不明であることが解せない。普通自分の創出した拳法について書き残すなら、いわゆる型や套路の説明と基礎理論の2本立てになるはずであるという見解。また「太極拳」という名前が決まったとされる時代のずれについて説明が付き難い。

6) 「十三勢歌」も王宗岳の作であるというが、「十三勢」は陳王廷の時代から陳家溝に伝わる拳の名称であり、「十三勢歌」はまさにその内容を口伝で歌っているものであり、これこそ武禹襄が楊露禪や陳家の人から聞き書きしたものであるに違いない。

7) 陳家とはまったく関係ない王宗岳が書いたものを、陳家や、楊露禪などが、自分たちの拳の名前や拳理として受け入れるはずが無いという説。

……………などなどさまざまな見解が提起されているのです。

王宗岳が書いたにせよ、武禹襄が書いたにせよ、『太極拳譜』、中でも「太極拳経(論)」が太極拳の拳理を中国の古代思想や養生法に照らして見事に整理し、これによって太極拳の名称を定着させたばかりでなく、従来門外不出であった太極拳の拳理を公開したところにきわめて重要な意味があることは論を待ちません。

しかし、上記のような数々の疑問点から類推すると、「太極拳経(論)」についても武禹襄自身が書いたものとしたほうが矛盾が無いという見解は十分納得的。少なくとも「十三勢歌」まで王宗岳の作であるというのは大変無理があります。「十三勢歌」は門外不出時代の陳家の口伝であることは間違いなく、それゆえにあえて武禹襄が「太極拳積名」と「十三勢行功要解」とを追加して資料としての整合性、統一性を補強したように見受けられます。

ではなぜ、武禹襄は王宗岳の名前を借りなければならなかったのかについての説は次号で。